

## シティ・プロモーション

アナ： 「市長が語る 2016 三島」第 17 回の今日は、「シティ・プロモーション」をテーマにお話を伺います。豊岡市長、よろしくお願いします。

市長： よろしく申し上げます。

アナ： ドラマ「ごめんね！青春」の舞台となったり、ディズニーパレードが開催されたりと、ここ数年の三島はとても活気があり、注目されている気がします。

市長： お陰様で、三島が広く発信され、うれしく思っています。行政だけで出来ることは限られているので、アンテナを高く保ち、様々な企業や団体から寄せられるご提案に、柔軟に対応してきた成果と考えています。

アナ： そうした三島市のカルチャーは素晴らしいですね。

市長： ありがとうございます。こうした全国的なブランドとの連携は、爆発力のある発信につながりますが、それだけで満足してはいけないとも思っています。

「そこに暮らす人が、誇りと愛情を持って作り上げた景観でなければ、訪れる人は感動しない」という言葉があります。自然、歴史、文化といった地域資源の本当の価値は、それを守り育ててきた市民の思いと行動にあり、共感を生み出す源泉です。こうした「シビック・プライド」の機運が高まれば、自然と、内への吸引力と外への発信力が生まれます。私は、ここにシティ・プロモーションの本質があるのだと考えています。

アナ： そのための新たな仕掛けとして何かお考えですか。

市長： はい、市内で活躍している女性のみを委員として迎えた「シビック・プライド／シティ・プロモーション共創会議」を立ち上げようと考えています。地域社会の主役である感度の高い女性に、シビック・プライドの機運を盛り上げる仕掛けや、シティ・プロモーションの在り方を検討していただき、具体的なアクションにつなげる戦略づくりをしていくことが目的です。

アナ： 女性だけの会議とは画期的で、同じ女性として期待が膨らみます。こうした戦略を練るうえで、三島の都市としての強みは、何だとお考えですか。

市長： 私は、三島の特有の「ほどほど感」がキーワードだと考えています。都会過ぎず、田舎でもない。まちなかには緑が溢れ、新幹線駅から 5 分でホテルの舞う源兵衛川などのせせらぎが流れています。その一方で、商店街には活気があり、美味しい地元産品を活かした飲食店も多く楽しい街です。富士・箱根・伊豆のリゾートへも 30 分圏内。首都圏との距離感も「ほどほど」です。

アナ： そうした三島の「ほどほど感」からくる暮らしやすさって、市民自身があまり認識していないようにも感じます。

市長： ずっと住んでいると当たり前と思いがちですよ。だからこそ、こうした三島

の魅力を、今一度、市民の皆さんと一緒に掘り起して、その価値を共有し、そのうえで、外部にも丁寧に発信していきたいと考えています。

ところで、どの自治体も人口減対策として、移住促進に力を入れていますが、十分な成果を上げているところが少ないのは、なぜだと思いませんか。

アナ： 実際、移住を実現するには、様々なハードルがあるからでしょうか。特に、仕事をどうするかは、生活していくうえで大きな問題です…

市長： そうですね。どこに住んでも仕事ができる特殊技能のある人はともかく、移住先で新たな仕事を見つけるのは大変です。そこがネックとなり、その意思があっても移住に踏み切れない人が多いはずです。この点、三島の場合は、新幹線通勤という処方箋があります。仕事は今まで通りで、生活の拠点だけ三島に移すことで、都会と田舎のいいとこ取りした生活が実現出来るのです。

アナ： 実際に、三島駅から首都圏に通勤している方はたくさんいるようですね。

市長： こうした三島のポテンシャルを生かした、シティ・プロモーションの取り組みとして、移住してこられた方や新幹線通勤している皆さんの生の声を通して、三島暮らしの提案をしていきたいと考えています。首都圏に住む、第1子が小学校に入学するタイミング、持ち家を取得するタイミングの家族がターゲットです。

アナ： 移住者が新しい風をとなり、三島にさらに活気が増していくといいですね。

市長： はい、そうした土壌づくりのために、市公式ホームページのトップページのリニューアルや、シティ・プロモーション特設サイト、ビジュアルで三島の魅力を発信する公式インスタグラムの立ち上げ、広報みしまの紙面リニューアルなど様々な仕掛けも準備中です。いずれにいたしましても、三島の一番の財産であるヒトを切り口に、市民の皆さんとの「協働」を、さらに進めた“共に創る”「共創」により、シティ・プロモーションを図っていきたいと考えているところです。

アナ： 豊岡市長、本日はありがとうございました。

市長： ありがとうございました。